

佐久市埋蔵文化財報告書 第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

周防畑遺跡群 南下北原遺跡

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書 第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

周防畑遺跡群 南下北原遺跡

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会



H 7-20 「刑部仁丸」
墨書土器碗（高台欠損、80%縮小）



検出-5 「貞観永寶（870年）」
（150%拡大）

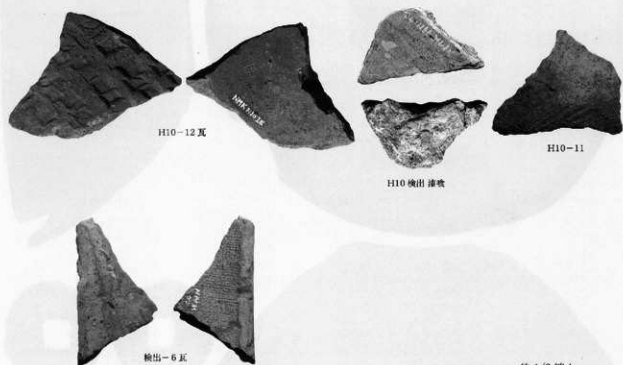
南下北原遺跡 報告書の概要

- 8世紀中頃(奈良時代後半)住居址 3棟(H8・H10・H11)
8世紀末～9世紀初頭頃(平安時代初頭)住居址 1棟(H2)
9世紀前半頃住居址 2棟(H4・H9)
9世紀後半頃住居址 3棟(H1・H7・H12)
10世紀後半～11世紀前半の住居址 2棟(H3・H6)

奈良の中頃から平安の中頃までの集落であろうことが判明した。部分的あるため密度については測り知れない。今後の調査が期待される。

H7号住居址から正位に「仁丸、十」1カ所、「刑部仁丸」2カ所が逆位に書いてある墨書土器碗が出土した。また皇朝十二銭の「貞観永寶」が検出面から出土している。

佐久郡の妙楽寺が定額寺(官寺)に任ぜられたのは貞観8年(866)である。墨書土器の晩年代が9世紀後半とみられ、検出面ではあるが皇朝十二銭の「貞観永寶」(870)が出土している。H10からは布目の平瓦、検出では布目の丸瓦があり、この地あたりは佐久郡衙関連、ことに隣接地から古代瓦が出土する事から定額寺関連の推定地のひとつとなっている。本調査で人名の墨書土器、布目瓦・皇朝十二銭の出土により、定額寺の有力候補地といえるであろう。



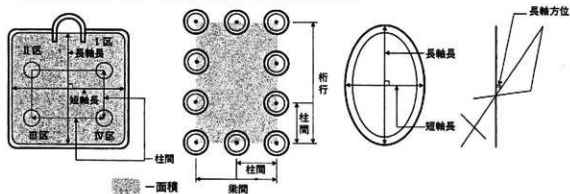
約 1/2 縮小

例 言

1. 本書は佐久市長土呂の丸五不動産株式会社の宅地造成事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 丸五不動産株式会社
3. 調査主体者 佐久市教育委員会文化財課
4. 遺跡名および所在地
周防畑遺跡群 南下北原遺跡 (NMK) 佐久市長土呂字南下北原996-1他
5. 調査面積 1, 296㎡
6. 発掘調査担当は出澤 力、報告書執筆は森泉かよ子が行った。
7. 本書及び本遺跡の出土遺物の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略号は以下の通りである。
 竪穴住居址—H 竪穴状遺構—Ta 土坑—D ビット—P 溝址—M
2. 挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
 遺構—1/80 遺物—1/4 但し、鉄製品・骨—1/2
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は2005年版『新版 標準土色帖』に基づいて示した。
5. 写真図版中の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。図版中の縮尺はほぼ挿図と同じである。
6. 遺構の計測は下図に示した測定値である。
 竪穴住居の面積は床面積で、長軸長×短軸長である。
 壁残高は最大長である。
 長軸長と短軸長の差が1割を越えたものを長方形とした。



住居址

掘立柱建物址

土坑

長軸方位

7. 遺物一覧表の () は推定値、〈 〉 残存値、—は測定不可能であることを示す。
9. 本報告書挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

遺 構



地山断面



焼土



粘土



柱痕



堀方



炭化物

遺 物



黒色処理



釉



須恵器断面



礫

目 次

巻頭図版

報告書の概要

例言・凡例

目 次

第I章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査日誌	2
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 基本層序	4
第III章 遺構と遺物	7
第1節 竪穴住居址	7
第2節 竪穴状遺構	20
第3節 土坑	20
第4節 溝址	21
第5節 単独ピット	21
第6節 検出遺物	21
第IV章 まとめ	22
遺構一覧表	23
遺物一覧表	24
写真図版	29
報告書抄録	
挿図目次	
第1図 遺跡の位置および周辺遺跡図 (1:20,000)	1
第2図 南下北原遺跡遺構配置図 (1:2,000)	3
第3図 南下北原遺跡全体図 (1:500)	5
第4図 H1号住居址	7
第5図 H2号住居址	8
第6図 H3号住居址	9
第7図 H4号住居址	9
第8図 H5号住居址	10
第9図 H6号住居址	11
第10図 H7号住居址(1)	13
第11図 H7号住居址(2)	14
第12図 H8号住居址(1)	15
第13図 H8号住居址(2)	16
第14図 H9号住居址	17
第15図 H10号住居址	18
第16図 H11号住居址	19

第17図 H12号住居址	19
第18図 竪穴状遺構	20
第19図 土坑	20
第20図 溝址	21
第21図 検出遺物	22

付表目次

第1表 南下北原遺跡遺構一覧表
第2表 H1号住居址出土遺物一覧表
第3表 H2号住居址出土遺物一覧表
第4表 H3号住居址出土遺物一覧表
第5表 H4号住居址出土遺物一覧表
第6表 H5号住居址出土遺物一覧表
第7表 H6号住居址出土遺物一覧表
第8表 H7号住居址出土遺物一覧表
第9表 H8号住居址出土遺物一覧表
第10表 H9号住居址出土遺物一覧表
第11表 H10号住居址出土遺物一覧表
第12表 H11号住居址出土遺物一覧表
第13表 土坑出土遺物一覧表
第14表 M1号溝址出土遺物一覧表
第15表 M2号溝址出土遺物一覧表
第16表 検出出土遺物一覧表

図版目次

巻頭図版	「刑部仁丸」墨書土器・貞観永寶
巻頭図版二	瓦他
図版一	H1～H3住居址
図版二	H3～H6住居址
図版三	H6～H7住居址
図版四	H7～H9住居址
図版五	H10～H11住居址
図版六	H112・竪穴状遺構・D1・M1
図版七	M2・M3・A～C地点全景
図版八	H1～H6出土遺物
図版九	H7出土遺物
図版十	H7・H8出土遺物
図版十一	H8～H11・D・M・検出出土遺物

第 I 章 発掘調査の概要

第 1 節 調査の経緯と経過

対象地は、周防畑遺跡群の所在する台地において、田切り地形の帯状台地上にある。東側では田切りの帯状低地に面し、台地は北から南に傾斜している。北側は削平、南は盛り土をして、グラウンドとして利用されていた。隣接する南の工場造成時の排土から古代寺院に関連すると推測される「川原寺式」の古代瓦が出土しているところである。今回、丸五不動産株式会社により宅地造成事業が計画され、平成 20 年度の試掘調査で、遺構遺物が検出されている。本調査は道路部分について、発掘調査が行われた。

遺 跡 名 南下北原（みなみしもきたはら）遺跡 略号 NMK
所 在 地 佐久市長土呂字南下北原 996-1 他
調査委託者 丸五不動産株式会社
開発事業名 宅地造成事業
発掘調査期間 平成 21 年 8 月 6 日～8 月 26 日
調査面積 1,296㎡
調査担当者 出澤 力



第 1 図 遺跡の位置および周辺遺跡図（1：20,000）

第2節 調査組織

平成21年度（2009）、平成22年度（2010）

教 育 長 木内 清（平成21年6月退職）土屋盛夫（平成21年7月～）
社会教育部長 内藤孝徳（平成21年4月～6月）工藤秀康（平成21年7月～）
社会教育部次長 金澤英人（平成21年4月～6月）
文化財課長 森角吉晴
文化財調査係長 三石宗一
文化財調査係 林 幸彦 並木節子 須藤隆司 小林眞寿 羽毛田卓也 富沢一明
上原 学 出澤 力 神津 格（平成21年10月）井出泰章（平成21年11月～）
調査担当者 佐々木宗昭 森泉かよ子
調査副担当者 堺 益子 武者幸彦
調 査 員

甘利隆雄 安藤孝司 飯森成英 岡村千代美 小井戸秀元 加藤 信一 風間 敏
川瀬祥太 小島 真 小林百合子 小山 功 坂井一夫 菊池喜重 滝沢三男
土屋武士 中島フクジ 日向昭次 細萱ミスズ 百瀬秋男 山田英暉 依田三男
横尾敏雄 油井満芳 渡辺久美子 渡辺 学
図面修正・遺物実測・トレース・編集
岡村千代美 狩野小百合 上山貴恵 加藤ひろ美 小林百合子 清水律子 堺 益子
田中久子 広瀬利恵子 細萱ミスズ 小幡弘子 細谷秀子 依田好行 柳沢重矢子
柳沢孝子

第3節 調査日誌

平成21年度

- 8月6日 重機を入れ、調査部分の耕土除去作業を行う。
調査区に基準点基準線を設定する。
本日より調査員を入れ、発掘調査を開始する。
A地点より遺構検出作業。H1を検出。
17日 B地点検出作業。H5の調査をする。
18日 E地点検出。H7の調査をする。H7より「刑部仁丸」墨書土器出土。
19日 C地点、H9調査。
21日 D地点、H10調査。
26日 現場作業終了。
室内にて土器洗浄、注記作業を行う。

平成22年度

- 5月21日 室内にて整理作業を再開。土器接合、
石膏復元、図面修正を行う。
遺物実測、遺構図・遺物のトレース、
版下作成、遺物写真撮影、
報告書割付、一覧表作成、原稿執筆
と報告書作成作業を行う。
3月 報告書刊行。

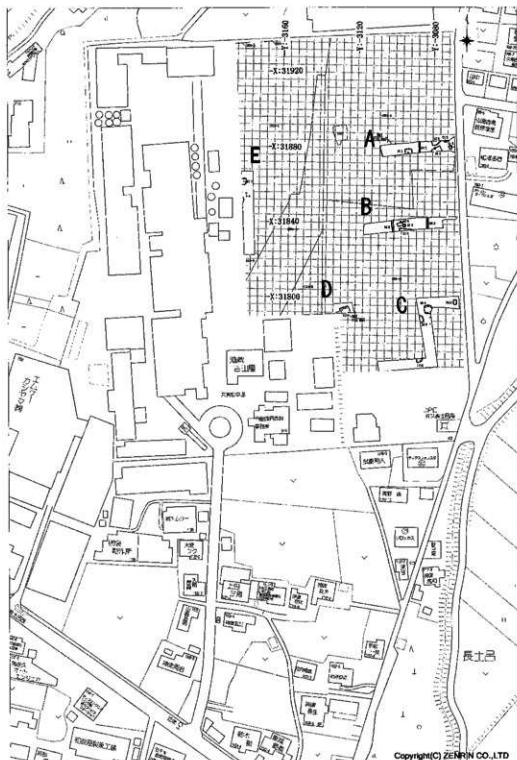


遺構検出風景

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

本調査地点は佐久市の北部、浅間山麓の岩村台地に位置し、標高717m前後を測る。この付近の



地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大熱泥流(塚原泥流)の黒色集塊岩である。その上部に、黒斑火山の発達過程に噴出した多量の火山灰・火山弾などの湖成堆積物(水平互層を繰返す湯川層)が重なっている。その上部に浅間火山噴出物である浅間第一軽石流(P1)が厚く堆積しているところである。

北側は浅間山から南西にかけて細長い台地となっている。浸食されやすい第一軽石流の火山灰が流されて「田切り地形」となっている。本調査遺跡も第一軽石流が浸食されて作り出した「田切り地形」の台地上にある。

第2図 南下北原遺跡遺構配置図 (1:2,000)

第2節 歴史的環境

本調査地点では、縄文時代の土器片があるが、住居址は認められない。弥生時代の遺構遺物はないが、弥生後期の集落と墓域が1kmほど南の台地先端部に展開している。周防畑遺跡B、宮の前遺跡、西近津遺跡群がある。ことに高速道路下の西近津遺跡群では国内最大級となる18×9.5mの長方形の竪穴住居址が検出され、床面積は46坪におよぶという。これほどの大型住居を建築できる勢力をもつ集団が佐久に形成されるに至ったのである。

古墳時代の初頭は、本遺跡の南、新幹線佐久平駅付近の周防畑遺跡群趾の前遺跡にある。箱清水土器の特徴を備えた割部球胴形の土器がみられ、S字口縁の台付甕を伴うことから古墳時代前期へと移ってゆく。隣接の下母塚遺跡のH8からは銅鍍が球胴形の弥生後期末の土器群ともに出土している。

古墳後期～奈良時代の遺跡は現在流通団地となっている聖原遺跡があり、馬具、八稜鏡、金銅製鈴、石製印「伯万私印」、緑釉陶器、皇朝十二銭などが出土している。

本調査地点南の工場建設の際に「川原寺式」とみられる古代瓦も出土している。これらから、古東山道、令制東山道、定額寺、牧、駅など官衙的性格の強い遺跡が考えられている地点である。

中世は岩村田市街の東に大井城跡があり、中世佐久の北の領主であった大井氏の居城とされている。南の黒岩城跡が発掘調査され、54棟の竪穴状遺構・掘立・土坑などからは15・16世紀の遺物を出土している。大井城跡の400mほど南の下信濃石遺跡では、大井氏の氏寺である龍雲寺の一部が調査されている。「大井」の墨書・刻書がここ長土呂地籍から多く出土し、大井の発祥の地とされている。

第3節 基本層序

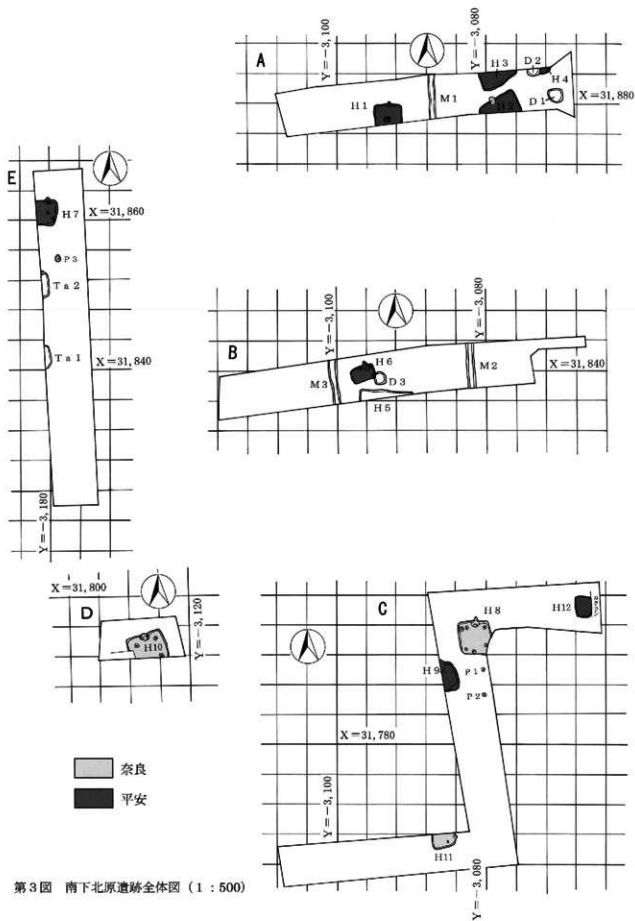
この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が、第一次黒斑火山大爆発の山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）である。湯川沿岸に点々と堆積し、黒色集塊岩の頂上部が姿を残している（3万年前ほど前）。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物の湯川層が重なっている。

塚原泥流発生後、仏岩火山活動があって、しばらく火山活動の休止期があり、その後2回の軽石流の噴出があった。最初の噴出物を第一軽石流（1万3千年前）、後から噴出したものを第二軽石流という。浅間山南麓に、広く展開した軽石流は、塚原泥流の地域に達すると、西と南に分かれ、南にむかった軽石流は湯川の谷を埋めた。（1988、『佐久市志 自然編』P83、1986白倉盛男『大井城跡』）

本遺跡は浅間第一軽石流に構築している。



E地点（南より）



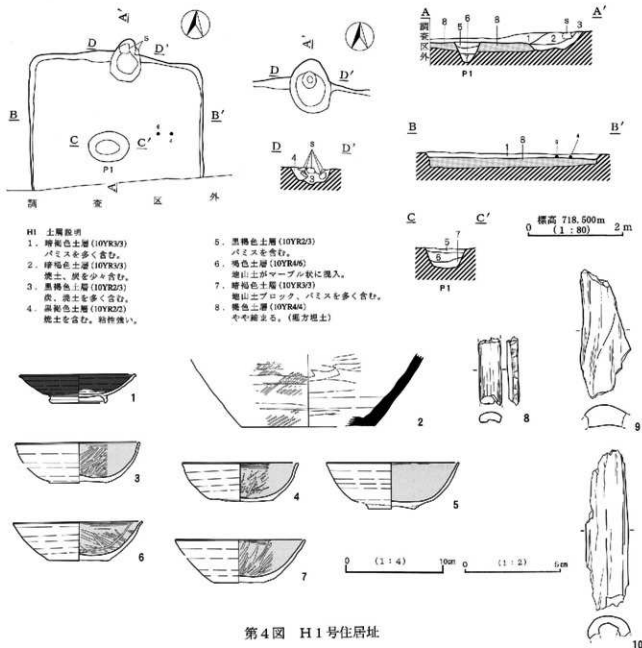
第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) H1号住居址

Aトレンチで検出され、南壁は調査区域外である。南北(2.56)m、東西3.52mの方形基調の住居址である。壁は6~23cmを測る。カマドは北壁にあり火床と煙道の礎がこる。カマド方位はN-3°-Wを指す。主柱穴は検出されていない。床面中央に床下土坑とみられる楕円形で84×63cm、深さ42cmのピットがある。

出土遺物は灰釉陶器・須恵器・土師器、骨が出土している。灰釉陶器は皿で釉薬が漬け掛けされる。高台は貼付され、三日月型を呈す。須恵器は四耳壺の底部であろうか外面に叩き目を残し、横ナデさ



第4図 H1号住居址

れる。実測できないが須恵器杯の口縁部片が1点ある。土師器甕はロクロ甕があり、外面下部がヘラ削りされている。小型のロクロ甕片もある。実測資料には土師器杯がある。いずれも黒色処理され、7の杯のみがミガキが丁寧になされている。4・6は雑なミガキの後、十字に暗文が施される。7の杯は底部周辺、底部がヘラ削りされている。3の杯の底部は薄いที่เขาは厚い。5の器肉は薄く、底径が4.5cmと小さく（他は6cm前後）、底部のみが貼り付けらる「底部柱状づくり」のものであろう。

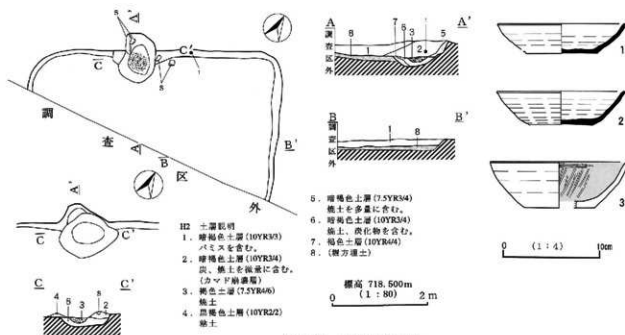
これらより9世紀後半が比定される住居である。

2) H2号住居址

Aトレンチにあり、住居の北側を調査している。南北1.08m、東西5.0m、壁高9~19cmを測る。カマドは北壁中央にあり、カマドの軸の方位はN-28°-Wを指している。カマドの西側壁には板状に糠が貼り付けられ、焼け込んでいる。カマドは粘土を貼って構築している。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は実測はしていないが厚さ1.3cmで、外面に叩き目のある大型の壺か甕の破片がカマドから出土する。須恵器長頸壺の口縁部片がある。須恵器高台付杯は丸底気味の底部に高台が貼付され、高台の畳付に凹線が入る。実測資料の須恵器杯は、底部回転系切りで、1の口縁は直線的、2の口縁は内湾し1より底径が7cmと0.5mm小さく、ロクロ痕が顕著である。土師器は武蔵甕片があるが実測はできない。土師器杯は厚手で、内面ミガキ黒色処理、底部は平底で、ヘラ削り調整がなされている。

これらより8世紀第4四半期ころから9世紀初頭が想定される住居である。



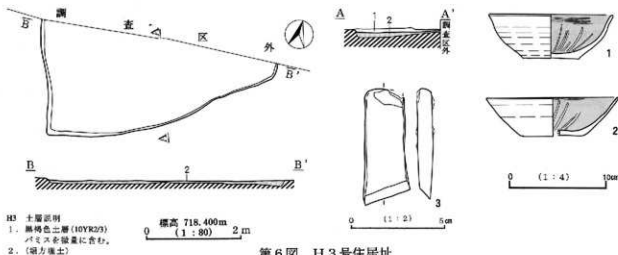
第5図 H2号住居址

3) H3号住居址

Aトレンチにあり、住居の南側を調査している。南北(2.24)m、東西4.76m、壁高0~11cmを測る。覆土は黒褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物には灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は碗の口縁で、内外施釉される。やや軟質なものである。須恵器は甕片と底部回転糸切りの杯、天井部がへら削りされる蓋があるが、破片のため実測はしていない。土師器のロクロ甕、武蔵甕片もある。実測資料では土師器杯・甕と鉄製の鋳がある。土師器杯は平底で、1は底部回転糸切り、2は底部回転糸切り後へら削りされる。いずれも内面は放射状の雑なミガキ後黒色処理がなされる。鋳は片刃で、長さ6.3cmを測る。

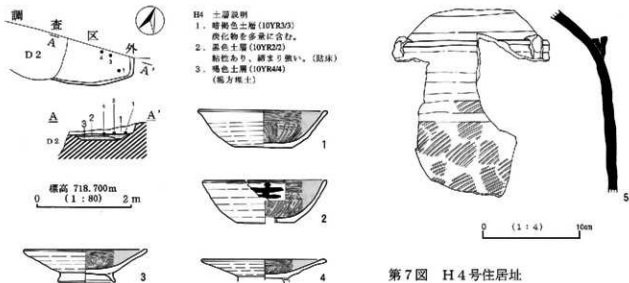
これらより、10世紀後半の住居址であろうか。



第6図 H3号住居址

4) H4号住居址

Aトレンチにあり、D2号土坑に切られている。南北(80)cm、東西(148)cmで、住居の南東部を調査している。D2の西にプランがないことから東西の規模は3m未満であろう。壁高は最大で20cmを測る。ピットは検出されていない。



第7図 H4号住居址

出土遺物には須恵器四耳壺、土師器武蔵甕片・杯・皿がある。四耳壺は肩に耳が貼付される。外面はナデ調整されるが、中位から下部は叩き目を残している。土師器杯は、底部回転糸切りで、内面は丁寧にミガキ調整後黒色処理される。2の杯外面には墨書があり、下部欠損ではあるが「土」まで判読できる。土師器皿は回転糸切り後高台を貼付している。内面はミガキ黒色処理されるが色変化して褐色を呈している。3の高台は外にいくらか反っている。

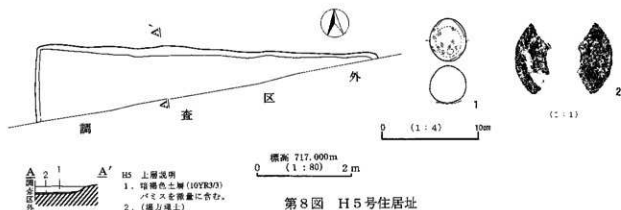
これらより9世紀前半の住居であろうか。

5) H5号住居址

Bトレンチにあり、南北(1.4)m、東西7.04m、壁高8~17cmを測る。住居の北壁を調査している。覆土は暗褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物は磨石と古銭である。土器片は出土していない。古銭は1/4残存し、判読不明である。

堀方が浅く、渡来銭とみられる破片があることから、中世の堅穴状遺構であろうか。



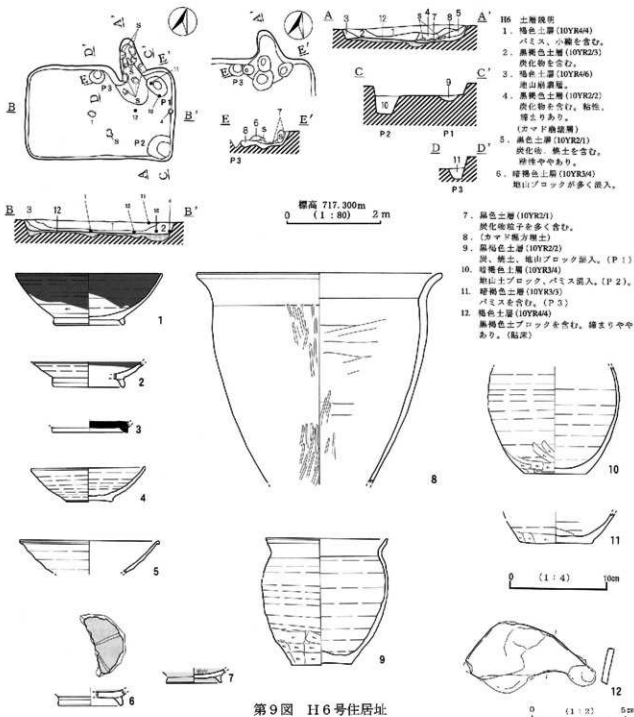
6) H6号住居址

B地点にあり、南北1.82m、東西2.98m、壁高は最大で27cm、5.4m²を測る長方形の住居である。カマドは北壁中央より東に寄っており、礫を芯材に粘土を貼って構築している。支柱穴は検出されていない。カマドの両脇にはピットがあり、東は浅いP1、西にあるやや深いP2(深さ20cm)がある。南東隅には円形の径50cm、深さ38cmの貯蔵穴がある。

出土遺物には灰軸陶器、須恵器、土師器がある。灰軸陶器は椀で、1は漬け掛けされ、高台は貼付される。高台の形態はいくらか内湾するものの断面形は四角に近いものである。2の灰軸陶器椀はハケ塗り、貼付される高台は三日月形態を少し残している。2の須恵器高台付杯は杯部がそろって欠け落とされ、再加工され円板になっている。4の土師器杯は底部回転糸切り、内面がナデ調整である。底部径は5cmと小さく内面の黒色処理はなされていない。5の杯の口縁内面もナデ調整のみである。6の椀は口縁がきれいに欠け落ちており、円板として二次利用されたものようである。7は黒色土器の皿とみられるが、内面は丁寧にミガキ、外面と高台内面はナデ調整である。8は内面にミガキ調整があることから順としたが、底部がないので甕であるかもしれない。9はロク口調整の小型甕である。底部は回転糸切り、胴下部はヘラ削り、口縁は横ナデ、胴中にロク口痕が残っている。内面はナデ調整され、ロク口痕は顕著ではない。やや厚みのある甕である。10のロク口小甕は、薄手で、胴

下部・底部はヘラナデに近いヘラ削りがなされ、胴部のロクロ痕もナデられる。内面はヘラ状具でナデられ、平行に横線が残る「カキ目」になっている。11の裏の底部は回転糸切り後、弱くヘラナデがなされている。内面はナデ調整である。

これらより、本址は10世紀後半～11世紀前半が想定される。



7) H7号住居址

E地点にあり、西壁が区域外である。南北3.02m、東西(2.62)m、最大壁高41cmを測る方形に近い住居とみられる。カマドは北壁の東寄りにあり、カマドの崩壊層上面より、多量の土器を出土している。I区より出土した土師器皿からは逆位に「刑部仁丸」が2カ所、正位に「仁丸十」が1カ所の墨書が合計3カ所にかかれた土師器碗の墨書土器が出土している。カマドは煙道上面に石を組んでおり、支脚石が直立していた。床面はしまっており、南の床下は東西に掘り込みがみられた。

主柱は住居址の中央東西にあったとみられ、東側のP1を調査した。円形で径34cm、深さ73cmを測る。東壁南寄りにあるP2はやや楕円形で長径43cm、深さ36cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品の断面長方形の角軸がある。灰釉陶器はない。須恵器はわずかで、実測個体の他に糸切り底の杯と小壺の破片ある。1の須恵器杯は底部回転糸切り後、ヘラでなでられたのか底部と口縁部が判然とせず、丸底状である。下部は張り、口縁上部は外反する。土師器は多量の杯と碗・皿・甕がある。土師器杯類は、19を除いて底部回転糸切り、いずれもミガキ黒色処理されている。6・9・11・13・18は口径に対し底径が5~6cmと小さいもので、7・13・18はやや大振りである。10・12・19は底径8cmと底径の割合が大きいものである。19は底部手持ちヘラ削りされる。2~5・14・15・17の底径は6.5cm前後の近い値である。ミガキの上に暗文を十字に施しているものは2・3・19がある。16の杯は鉢とするべきなのか大振りである。内面ミガキ黒色処理、底部糸切り後口縁下部、底部周辺が回転ヘラ削りされる。

土師器甕は武蔵甕とロクロ甕がある。武蔵甕は口縁部形態「コ」字形態である。28の外側胴部は斜め削りに縦方向の削りの重りがみられる。ロクロ甕は胴下部に削り調整をしている。

これらより9世紀後半の住居址と想定される。

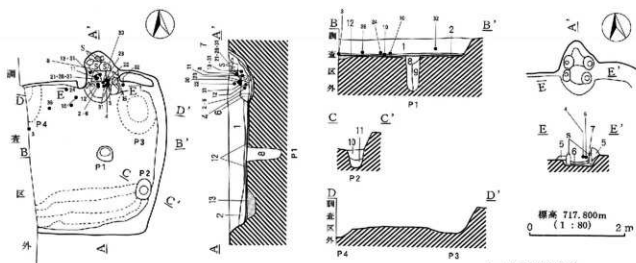
8) H8号住居址

C地点にあり、南東隅がわずかに調査できていない。南北2.97m、東西2.96mの方形の住居で、最大壁高54cmを測る。カマドは北壁中央にあり、火床は住居址の内側に設けられる。カマドの軸方位はN-6°-Wを指す。カマドは袖先端に石を立てて粘土で袖をつくり、焚き口に長さ40cmの石を乗せて焚き口としていたようである。支脚石は直立した状態で検出された。

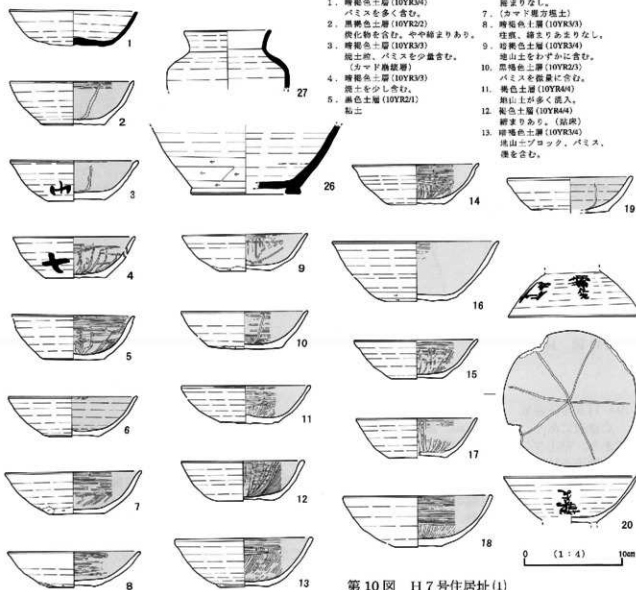
主柱穴はP1~P4の4本で南側はビットが重複していることから立て替えがなされたようである。径40cm、深さ40cm規模のものである。P6とP7は西壁によって南北にあるビットで径は60cmと大きい深さは20cm前後である。P5は南の壁下にあり、径58cm、深さ17cmを測る。出入り口にあるビットであろう。

出土遺物には須恵器、土師器、石製品、鉄製品、羽口がある。須恵器は、蓋、杯、高台付杯、広口壺、長頸壺がある。1の蓋は小型の宝珠形のつまみが付き、外面天井部のヘラ削りは手持ちで不規則になされ、口縁端部の折返しはわずかである。2の須恵器杯はロクロ痕が顕著で、底部は手持ちヘラ削りされる。3の杯はナデ調整がなされ、ロクロ痕は消されている。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラナデされている。4の高台付杯は幅広の疊付である。内外面ナデ調整される。6は長頸壺、7・8は広口壺であろうか、8の器内は薄い。須恵器の器種が豊富である。土師器杯は破片で少数はあるが、実測資料はない。内面ミガキ黒色処理され、底部にヘラ削りがされている。土師器甕は武蔵甕、ロクロ甕、羽釜がある。13の武蔵甕は口縁の外反強く、肩が張り肩に最大径をもつ。14の甕は口縁部が長く「く」字形を呈し、口径が大きい。15はその下部であろう。10・11は小型のロクロ甕で、胴下部・底部はヘラ削りがなされている。外面のロクロ痕はナデ調整されロクロ痕は顕著ではない。12の羽釜はロクロ調整後鈎が付けられ、口縁横ナデ、胴部ヘラ削りされている。内面は口縁にロクロ痕が顕著であるが、胴部はナデ調整される。

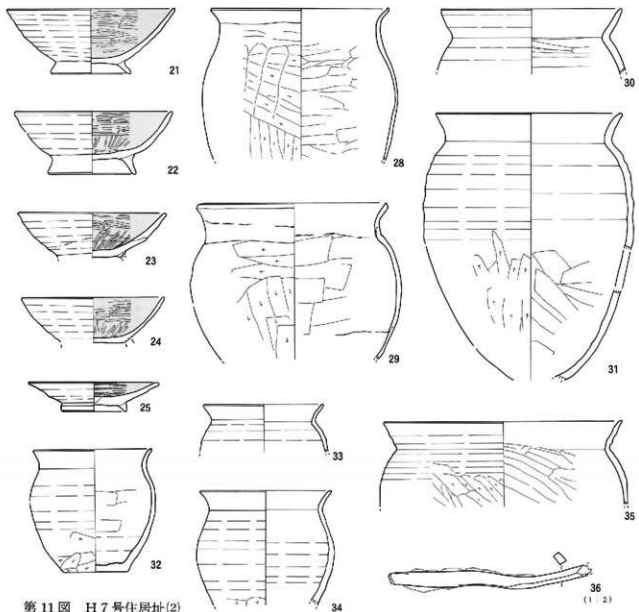
16・17は葎石、磨石、19は青銅製、20は鉄製、21は鉄で断面円形の棒状であるが不明品である。これらより、本住居は8世紀第3四半期頃が当てられよう。



- H7 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/4)
パミスを多く含む。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/2)
炭化物を含む。やや粘りあり。
 3. 暗褐色土層 (10YR3/3)
灰土状。パミスを少し含む。
(カマド跡層)
 4. 暗褐色土層 (10YR3/3)
灰土を少し含む。
 5. 褐色土層 (10YR2/1)
粘土
 6. 褐色土層 (10YR4/6)
灰土を含む。やや脆成をうける。
粘りなし。
 7. (カマド裏方粘土)
 8. 暗褐色土層 (10YR3/3)
柱頭。粘りあまりなし。
 9. 暗褐色土層 (10YR3/4)
灰土をおおやかに含む。
 10. 黒褐色土層 (10YR2/3)
パミスが豊富に含む。
 11. 褐色土層 (10YR4/4)
灰土が多く混入。
 12. 褐色土層 (10YR4/4)
粘りあり。(証候)
 13. 暗褐色土層 (10YR3/4)
流山ニゴロツタ。パミス、
灰を含む。



第10図 H7号住居址(1)



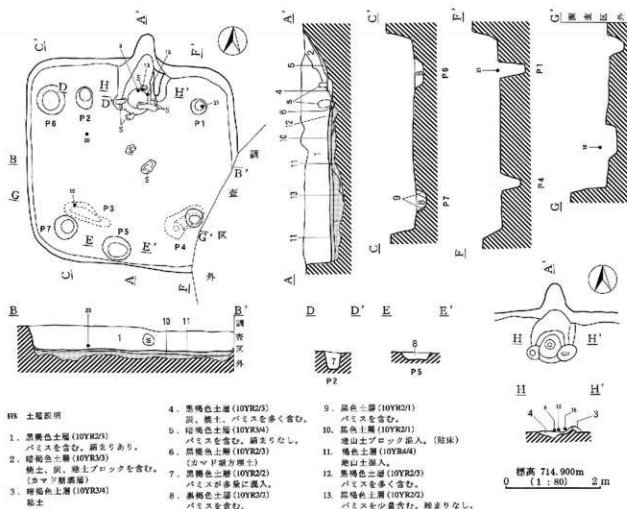
第11図 H7号住居址(2)

9) H9号住居址

C地点にあり、南北3.38m、東西(1.92)mをはかり、住居の東半城を調査した。最大壁高は36cmである。粘土ブロックが北壁にみられ、カマドとみられるが、攪乱により壊されたようである。ピットは検出されていない。

出土物には須恵器、土師器、鉄製品がある。須恵器は大型品の破片がある。口縁は外反し、内外横ナデ、外面肩部には横線がのり、内面には当て具痕残る。須恵器杯の口縁部破片も出土している。土師器は武藏斐胴部片と杯、椀、皿がある。土師器杯類の内面はいずれもミガキ黒色処理される。9の皿は外面底部ともにミガキ黒色処理される黒色土器である。4の土師器杯は底が厚く、底部手持ちヘラ割りしている。5の椀の外面は墨書があるが判読できない。

これらより本住居址は9世紀前半とされよう。



第12図 H 8号住居址(1)

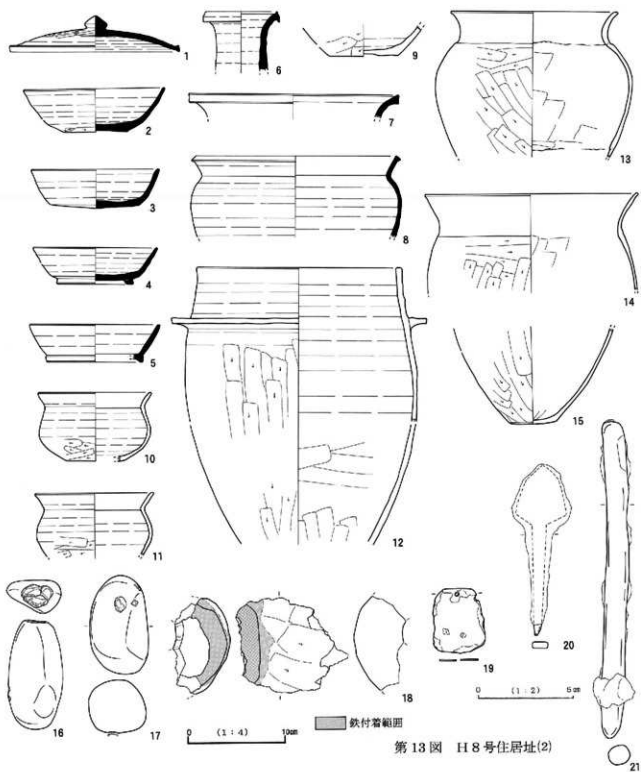
10) H10号住居址

D地点にあり、南が調査区域外である。南北(3.34)m、東西4.82m、最大壁高38cmを測る。カマドを北壁中央に持ち、カマドの方位はN-19°-Wを指す。カマドは礎を芯にして、粘土で構築しており、袖と火床が残っていた。床面はしまっており、粘土ブロックを含んでいる。

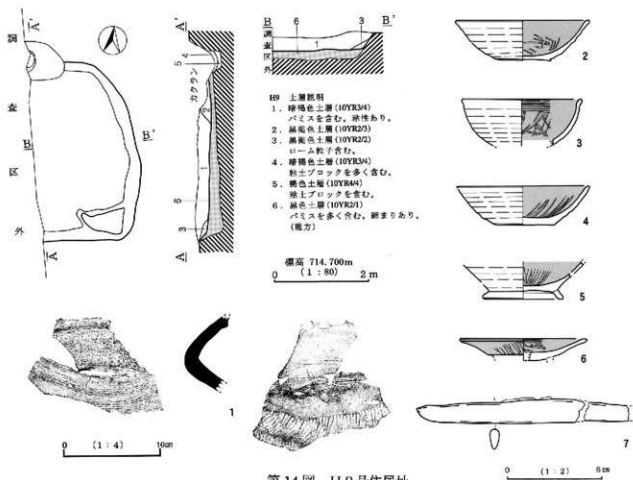
主柱穴はP1~P3の3本が方形に検出され、径46~62cm、深さ37~52cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製の刀子がある。須恵器は蓋、杯、高台付杯がある。蓋は口径21cm前後で大振りであり厚手である。カマドの構築材として使用されたのが粘土が付いており、3の高台付杯とともに火床上面から出土する。須恵器杯は4・5が底部回転糸切りのままで、6はヘラ削りされる。5の底径は小さく3.7cm、4は4.6cm、6は(9.0)cmと差がある。土師器は甕形土器があり、薄手の武蔵甕である。7は口縁部形態が「く」字形である。8はやや厚みのある武蔵甕の小型甕で、胴部が扁平である。9の胴下部はヘラ削りされるが、内面にロクロナデが残っていることからロクロ甕の小甕であろう。

これらより、5の須恵器杯などから8世紀第3四半期の住居であろう。1~3の土器は前代のものであろう。



第13图 H8号住居址(2)



第14図 H9号住居址

11) H11号住居址

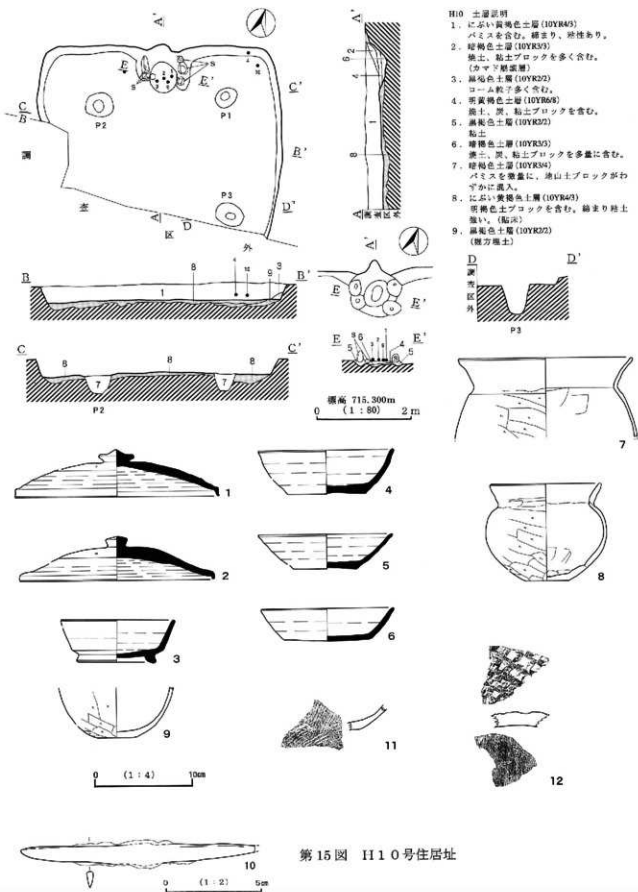
C地点にあり、住居の南半城を調査している。南北(1.64)m、東西3.08cm、最大壁高17cmを測る。カマドは東壁の南東隅に近くにあり、焼土がみられた。柱穴は南にP1があり、径33cm、深さ19cmを測る。

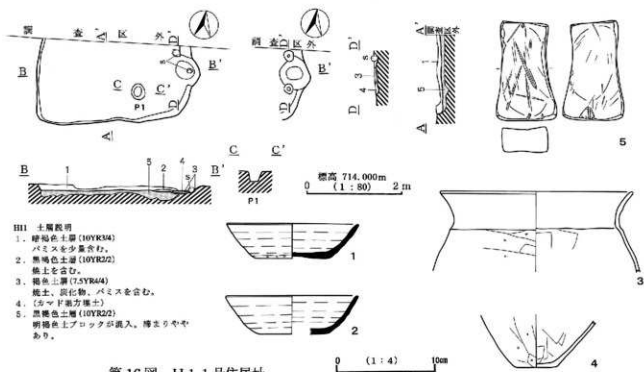
出土遺物には須恵器、土師器、凝灰岩製砥石がある。須恵器杯は1・2とも底部は手持ちヘラ削りされている。土師器は甕があり、武蔵甕である。口縁部形態「く」字形である。

これらより本址は8世紀第3四半期があてられようか。

11は外面にハケ目のある土師器甕のおそらく小型甕の底部片で、胎土にウンモ粒・石英粒が含まれる。12は布目の平瓦で、表面はタタキ目、内面は布圧痕を消してヘラナデがなされている。厚さ1.4cmを測る。

また、巻頭二に示したが長さ4cm・厚さ1cmほどの漆喰片が検出面から出土している。片面は滑らかである。壁の一部と推測されるが、瓦片と関連する意味深いものか、検出であるため混入も考えられ明言はさけない。



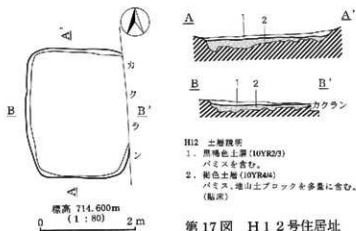


12) H12号住居址

C地点にあり、東に攪乱が南北に入る。南北2.62m、東西(2.04)mの長方形を呈す。壁高は0~12cmである。覆土は黒褐色土層である。カマド、柱穴は検出されていない。

実測できる遺物はないが底部回転糸切りの須恵器杯、灰軸陶器は壺、段皿、皿がある。土師器は内面ミガキ、黒色処理の杯、土師器裏は武蔵燧片がある。

これらより、平安時代の住居址であろう。

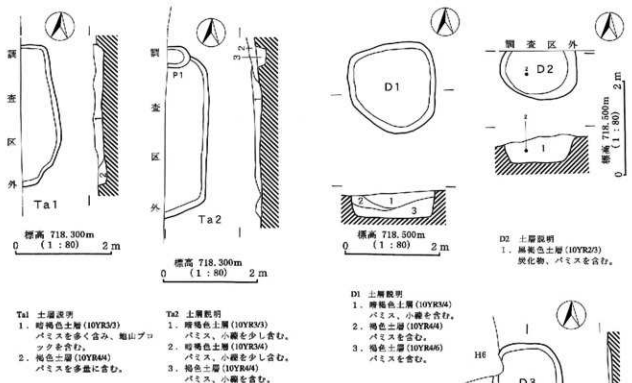


第2節 竪穴状遺構

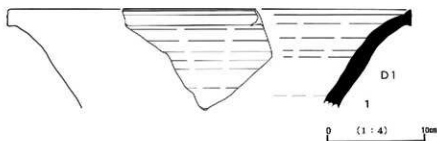
Ta1・Ta2ともにEトレンチにあり、東側を調査している。形態も明確ではなく、出土遺物がないので時期はわからない。性格も不明である。

第3節 土坑

本調査では3基の土坑が検出された。D1からは須恵器大型品の甕口縁、土師器は内面ミガキ黒色処理の椀があり、D2からは鉄鏝が出土している。



第18図 竪穴状遺構

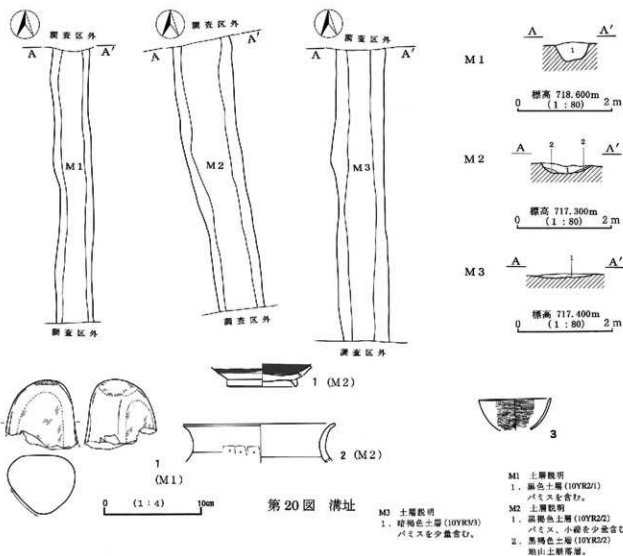


第19図 土坑



第4節 溝址

M1とM2は南北方向に連続するようである。M2から灰軸陶器椀が出土する事から平安時代の溝である。M2-2の土師器甕は丸胴甕で、古墳時代後期から奈良のものであろう。M3は遺物がないので時期は不明である。



第5節 単独ビット

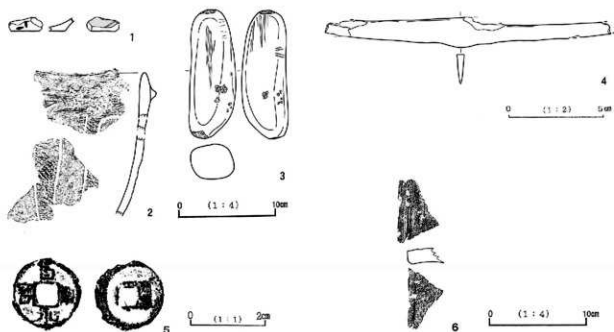
検出したのはC・E地点から3個である。径・深さともにあり、規模が大きいため、掘立柱建物址の一部とみられる。

第6節 検出遺物

5の「貞観永寶」は皇朝十二銭の一つで、870年から20年間鑄造されている。皇朝十二銭のなかでは鋳銭が粗雑になり、小さくなっている。

6は丸瓦であろうか、厚さ1.3cm、内面に布目を残し、外面はヘラナデされている。

縄文土器が3点ある。縄文後期称名寺で、地紋に無節の縄文、沈線区画し磨消縄文がなされる。図示していないが、H10からは縄文後期の粗製の深鉢口縁片、A地点流路からは加曾利B深鉢口縁片がある。



第21図 検出遺物

第IV章 まとめ

南下北原遺跡の今回の調査では奈良から平安時代の集落が確認された。奈良時代中頃に集落が開け、平安時代の10世紀頃まで継続するようである。

本調査は部分的な調査ではあったが、大きな成果を得た。H7号住居址から出土した「刑部仁丸」の墨書土器である。平安時代の百科事典『和名抄』には、佐久八郷の中に「刑部」が記されている。佐久八郷は奈良時代後半には成立していたとみられており、「刑部郷は、千曲川左岸の平坦部、岸野・野沢地区から白田あたりの伴野庄あたりで、佐久でもっとも早く稲作の開けた地帯としている。」（『佐久市志』P479）ちなみに本調査地点は、大井郷にあたり、岩村田を中心とした地域であり、大井発祥の地は長土呂と言う説もあり、長土呂地点からは平安時代の「大井」の刻書・墨書土器が多く出土している。既出資料「刑部」の墨書は、岩村田市街の北、高速インター付近の上久保田向遺跡1のH6（9世紀）の椀にみられた。南下北原遺跡H7号住居址が刑部郷の刑部を名乗る「刑部仁丸」という人と関係していたことは明らかである。人名を記した墨書は群衙・官寺などから出土するといわれている。（2000、高島英之『古代出土文字資料の研究』）多量に出土した杯類も関連するのであろう。また刑部郷ではないところから出土することで、ここ長土呂地点に物や人が集まる要因があるとなれば、群衙や定額寺との関連について考慮される。

第1表 南下北原遺跡 遺構一覧表

跡穴位置・跡穴状況

遺構名	跡穴位置	時代	形態	規模 (cm・m)		面積	主軸方位	カマド跡	柱六	備考
				南北長	東西長					
H1	A	平安	—	(256)	352	6~23	N-3°-W	北	他1	西側調査区外、
H2	A	平安	—	(180)	500	9~19	N-28°-W	北	—	南側調査区外、
H3	A	平安	—	(224)	476	0~11	N-16°-W	—	—	北側調査区外、
H4	A	平安	—	(80)	(148)	0~20	N-20°-W	—	—	北側調査区外、D2に切られる、
H5	B	不明	—	(140)	704	8~17	N-2°-E	—	—	南側調査区外、
H6	B	平安	長方形	182	298	17~27	N-18°-W	北東	跡穴1 他2	D3を切る、
H7	E	平安	—	302	(262)	25~41	N-4°-E	北東	平柱1 他1 床下2	西側調査区外、
H8	C	奈良	円形	297	296	42~54	N-6°-W	北	平柱4 他3	南東調査区外、
H9	C	平安	—	338	(192)	11~36	N-7°-W	北	—	西側調査区外、カクランに切られる、
H10	D	奈良	—	(334)	482	14~38	N-19°-W	北	平柱3	南側調査区外、
H11	C	奈良	—	(164)	308	2~17	N-82°-E	東	平柱1	北側調査区外、
H12	C	平安	長方形	262	204	0~12	N-2°-W	—	—	カクランに切られる、
Ta1	E	不明	—	284	(72)	11~18	N-4°-W	—	—	西側調査区外、
Ta2	E	不明	—	300	(80)	0~6	N-6°-W	—	他1	西側調査区外、

(例) (確定)

遺構名	跡穴位置	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	長軸方位	備考
D1	A	不整形	192	180	60	N-7°-W	—
D2	A	—	160	(104)	42	N-86°-E	北側調査区外、H4を切る、
D3	B	長方形	162	144	13	N-3°-W	N-3°-W、H6に切られる、

(例) (確定)

遺構名	跡穴位置	全長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
M1	A	(5.78)	72~80	22	南北調査区外、
M2	B	(5.16)	96~110	14~38	南北調査区外、
M3	B	(5.76)	92~122	5~23	南北調査区外、

(例) (確定)

遺構名	跡穴位置	規模 (cm・m)			平面形	備考
		長さ	幅	深さ		
P1	C	46	45	34	円形	—
P2	C	54	44	18	楕円形	—
P3	E	88	58	61	楕円形	—

第2表 H1 丹住地区出土遺物一覧表

番号	種類	形状	口徑(長)	口径(短)	口径(底)	口径(厚)	口径(底厚)	重量(g)	内面	外面	文様	備考	出土位置
1	穴通器	環	(12.4)	(0.2)	(3.1)				黒銅	黒銅	糸切り後高付足付		Ⅱ区
2	家通器	環	-	(14.0)	(7.7)				ロクロナデ→ナデ	タタキ→横ナデ			Ⅱ区
3	土師器	杯	(13.2)	6.0	4.2				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→底部回転糸切り			ⅠK
4	土師器	杯	12.2	6.8	4.2				ミガキ→赤文→黒色焼酎	ロクロナデ→底部回転糸切り			No.2
5	土師器	杯	(14.1)	(5.0)	5.0				ナデ(一筋ミガキ)→黒色焼酎	ロクロナデ→底部回転糸切り			地方
6	土師器	杯	13.7	6.5	4.2				ミガキ→赤文→黒色焼酎	ロクロナデ→底部回転糸切り			No.1
7	土師器	杯	(13.8)	5.3	4.8				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→下部・底部へラケズリ			Ⅰ区
番号 種類 形状 重量(g)													
8	骨	骨	(2.6)	(1.2)	(0.2)			(1.54)					Ⅱ区
9	骨	骨	(6.8)	(2.2)	(1.1)			(7.02)					P.1
10	骨	骨	(8.5)	(2.4)	(0.7)			(8.91)					Ⅰ区

第3表 H2 丹住地区出土遺物一覧表

番号	種類	形状	口径(長)	口径(短)	口径(底)	口径(厚)	口径(底厚)	重量(g)	内面	外面	文様	備考	出土位置
1	須恵器	杯	(13.6)	7.5	3.2				ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り			No.1
2	須恵器	杯	(13.8)	(6.8)	3.6				ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り			Ⅱ区
3	土師器	杯	(14.5)	(7.4)	(4.9)				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→ナデ			カマド

第4表 H3 丹住地区出土遺物一覧表

番号	種類	形状	口径(長)	口径(短)	口径(底)	口径(厚)	口径(底厚)	重量(g)	内面	外面	文様	備考	出土位置
1	土師器	杯	(13.2)	(6.0)	4.7				赤文	赤文	黒色焼酎		Ⅰ区
2	土師器	杯	(14.0)	(6.8)	(4.2)				赤文	赤文	黒色焼酎		Ⅰ区東方
番号 種類 形状 重量(g)													
3	鉄製品	釵	(6.2)	2.5	0.8			(67.63)					Ⅱ区

第5表 H4 丹住地区出土遺物一覧表

番号	種類	形状	口径(長)	口径(短)	口径(底)	口径(厚)	口径(底厚)	重量(g)	内面	外面	文様	備考	出土位置
1	土師器	杯	13.8	6.1	4.1				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→回転糸切り			No.1
2	土師器	杯	(13.2)	(6.2)	4.6				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→回転糸切り			No.2
3	土師器	皿	13.1	6.0	4.8				赤文	赤文	黒色焼酎		No.3
4	土師器	皿	13.3	-	2.2				ミガキ→黒色焼酎	ロクロナデ→回転糸切り			Ⅰ区トレンチ
5	須恵器	四耳罐	-	-	-				タタキ→ナデ→耳高付	青銅組立付			

第6表 H5 丹住地区出土遺物一覧表

番号	種類	形状	口径(長)	口径(短)	口径(底)	口径(厚)	口径(底厚)	重量(g)	内面	外面	文様	備考	出土位置
1	石製品	磨石	4.5	3.8	3.9			(7.34)					Ⅱ区トレンチ
2	青銅	片断	(1.0)	(0.8)	0.1			(0.88)					

() 残 () 推定

() 残 () 推定

() 残 () 推定

() 残 () 推定

() 残 () 推定

第7表 II6号仕出州土産物一覧表

品目	種類	器	原産地		重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)	備考	出上位置
			山口県	山口県					
1	水筒	銅	116.6	7.9	6.3			山口県	
2	炭筒	銅		(7.4)	(6.6)			山口県	
3	茶筒	高台杯		8.0	(1.2)			完全炭筒	
4	土師器	杯	12.0	4.8	3.6			完全炭筒	
5	土師器	杯		(14.6)		(3.5)		山口県	
6	土師器	筒		(6.6)	(1.7)			山口県	
7	土師器	黒色杯		5.8	(1.5)			山口県	
8	土師器	瓶	(25.8)		(2.4)			カマド	
9	土師器	小袋	(12.8)	6.4	13.4			山口県	
10	土師器	小袋		6.6	(11.3)			山口県	
11	土師器	杯		7.6	(3.2)			No.2	
12	焼製品	?		(3.8)	(0.7)	(37.38)		No.3	

第8表 II7号仕出州土産物一覧表

品目	種類	器	原産地		重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)	備考	出上位置
			山口県	山口県					
1	漆器	杯	13.4	5.6	4.0			カマド	
2	土師器	杯	13.0	6.7	4.7			No.14	
3	土師器	杯	13.4	5.9	4.3			No.6	
4	土師器	杯	(22.7)	6.3	4.6			No.19	
5	土師器	杯	(24.8)	6.5	4.7			No.17	
6	土師器	杯	13.6	6.7	4.3			No.11	
7	土師器	杯	14.3	6.7	4.6			カマド II区	
8	土師器	杯	14.0	5.3	3.8			No.8	
9	土師器	杯	13.4	5.5	4.0			カマド	
10	土師器	杯	13.5	7.9	4.1			No.2 No.3	
11	土師器	杯	13.7	6.1	4.1			No.13	
12	土師器	杯	(13.2)	(6.2)	4.3			No.12	
13	土師器	杯	14.8	5.6	5.2			カマド	
14	土師器	杯	(13.5)	(5.3)	4.1			IV区	
15	土師器	杯	(13.2)	(5.4)	4.1			I区	
16	土師器	八片	(17.6)		(8.3)			山口県	
17	土師器	杯	(12.8)	(6.4)	4.2			カマド	
18	土師器	杯	(15.8)		5.4			完全炭筒	

() 残 () 推定

() 残 () 推定

番号	産別	原産地	品名	重量(kg)	産別	品名	重量(kg)	備考	出仕位置
19	干物器	坪	14.1	8.1	口クロナチー	十字結文一黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	カマド
20	干物器	坪	14.0	5.0	口クロナチー	ナチー結文一黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	1区
21	土師器	椀	17.8	8.5	ミガキ	黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	No.18
22	土師器	椀	16.7	9.4	ミガキ	黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	No.7
23	土師器	椀	16.6	6.8	ミガキ	黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	No.15
24	干物器	椀	15.0	-	ミガキ	黒色型製	口クロナチー一部黒ヘラケズリ	完全実測	No.4 カマド III - IV区
25	土師器	皿	13.8	7.0	ミガキ	黒色型製	口クロナチー高台貼付	完全実測	カマド
26	煮飯器	蓋	11.6	7.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー、下部黒ヘラケズリ一高台貼付	完全実測	1区
27	煮飯器	短柄杓	0.2	-	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III - IV区
28	土師器	成置瓶	18.8	16.0	ヘラケズリ	一黒色型製	新部ヘラケズリ・口縁横ナチ	完全実測	No.18 カマド
29	土師器	武藏瓶	20.1	16.6	ヘラケズリ	一黒色型製	ヘラケズリ一黒色型製	完全実測	I - IV区 P1
30	干物器	口クロナチー	11.0	6.5	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.16
31	干物器	口クロナチー	10.3	6.5	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.10
32	土師器	小蓋	12.6	7.0	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.11
33	土師器	小蓋	12.6	6.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	カマド
34	土師器	小蓋	13.5	12.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.18 カマド
35	土師器	口クロナチー	25.6	8.6	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	カマド
番号	産別	原産地	品名	重量(kg)	産別	品名	重量(kg)	備考	出仕位置
36	鉄製品	刀子	10.6	1.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.5

() 裏 () 横

第9章 H 8号住居出土遺物一覧表

番号	産別	原産地	品名	重量(kg)	産別	品名	重量(kg)	備考	出仕位置
1	漆器	蓋	17.9	3.8	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III区
2	磁器	杯	14.8	6.5	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	I - II区
3	羽器	杯	13.4	4.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	IV区
4	漆器	杯	12.9	7.9	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	カマド III区
5	漆器	着台杯	18.6	10.0	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III区
6	漆器	蓋	7.6	6.3	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III - IV区
7	漆器	蓋	22.2	7.5	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III区
8	漆器	小蓋	21.2	3.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	No.1
9	漆器	小蓋	7.3	3.2	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	III区
10	土師器	小蓋	11.8	6.0	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	カマド IK
11	土師器	小蓋	12.4	6.7	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	1区
12	土師器	短柄杓	31.7	29.4	口クロナチー	ナチー	口クロナチー	完全実測	1区 カマド

番号	種別	図録	重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)	備考
13	十層品	式器類	(17.6)	(15.0)		ナチーロ口蓋模ナ子 胴部ヘラケズリ→山崎模ナ子
14	上層品	式器類	22.4	(16.0)		ナチーロ口蓋模ナ子 胴部ヘラケズリ→口蓋模ナ子
15	十層品	式器類	-	(10.2)		ナ子 ヘラケズリ
16	種別	重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)		
17	石製品	磨物石	11.6	5.8	3.1	胴部にスリ面あり 片面上部に板打痕
18	石製品	磨物石	10.5	6.3	5.6	胴部にスリ面あり 正面の隅には縦き線? 突山出
19	十層品	式器類	(5.9)	(5.0)	(2.7)	上部鉄付着 外面ヘラケズリ
20	十層品	式器類	3.5	2.7	0.1	3.77
21	十層品	式器類	6.2	3.1	1.5	27.93
22	十層品	式器類	17.0	2.2	2.0	37.81

第10表 H9 村仕郎出土木器物一覧表

番号	種別	図録	重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)	備考
1	須臾品	茶	14.0	3.6	4.2	ロクロナ子 自然焼付着
2	上層品	杯	(12.6)	-	(5.0)	ロクロナ子 低部凹縁糸切り
3	十層品	杯	(13.0)	6.6	4.1	ロクロナ子
4	上層品	杯	-	8.4	(4.0)	ロクロナ子 底部ヘラケズリ
5	十層品	杯	(13.4)	-	(2.2)	ロクロナ子 切り磨し低部凹縁付 断面?;
6	十層品	皿	-	-	-	ミガキ一黒色処理 高台付
7	須臾品	刀子	(11.1)	(1.0)	(0.98)	ミガキ一黒色処理

第11表 H10 写村仕郎出土木器物一覧表

番号	種別	図録	重量 (g)	長さ (cm)	直径 (cm)	備考
1	須臾品	盃	(21.6)	-	5.0	ロクロナ子
2	須臾品	盃	(20.0)	-	4.6	ロクロナ子 天目部ヘラケズリ→つまみ出付
3	須臾品	高杯	(20.0)	8.1	4.5	ロクロナ子→ヘラケズリ→つまみ出付
4	須臾品	杯	(14.4)	8.2	4.6	ロクロナ子 底部凹縁糸切り
5	須臾品	杯	(14.3)	7.0	3.7	ロクロナ子→低部凹縁糸切り
6	須臾品	杯	(14.0)	(9.0)	3.5	ロクロナ子→ヘラケズリ
7	上層品	式器類	(18.4)	-	(8.5)	口蓋模ナ子 胴部ヘラケズリ
8	十層品	小壺	(11.8)	4.8	10.3	胴部ヘラケズリ
9	十層品	小壺	-	4.3	(5.3)	胴部ヘラケズリ
10	須臾品	刀子	(12.5)	(1.5)	(1.0)	胴部ヘラケズリ

番号	種類	器種	口徑(厘米)	底徑(厘米)	高さ(厘米)	重量(グラム)	出所	調査文書	備考	出土位置
11	土師器	鉢	-	-	-	-	ナデ	ハケ目	拓本	1区
12	瓦質	瓦	-	-	-	-	小田→ヘラナデ	カタキ	拓本	() 残 () 推定

第12表 III11号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	口徑(厘米)	底徑(厘米)	高さ(厘米)	重量(グラム)	出所	調査文書	備考	出土位置
1	須恵器	杯	14.0	7.4	3.7	-	ロクロナデ	ロクロナデ一部→ヘラナデ(ヘラケズリ)	完全実測	カマド
2	須恵器	杯	14.1	7.9	4.1	-	ロクロナデ	ロクロナデ 磁部ヘラナデ	完全実測	目区
3	土師器	武藏美	20.1	-	8.5.0	-	ナデ・口輪ナデ	口輪ナデ 胴部ヘラケズリ	完全実測	カマド
4	土師器	武藏美	-	4.6	5.6	-	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	カマド
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
5	石製品	竈石	10.5	6.4	3.1	293.76	保証家6	正業に本紙(磁止)と検状(磁止) 磁器片		() 残 () 推定

第13表 土坑出土遺物一覧表

番号	種類	器種	口徑(厘米)	底徑(厘米)	高さ(厘米)	重量(グラム)	出所	調査文書	備考	出土位置
1	須恵器	鉢	42.8	-	10.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	D1
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
2	鉄製品	鉢	13.4	5.6	0.7	21.64	-	-	完全実測	D2-No1
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
第14表 M1号溝址出土遺物一覧表										
1	石製品	磨石	7.4	6.5	45.40	-	下部穴積	上部部に磨打痕 正業にすり面 火焼を交ける、安山岩		() 残 () 推定

第15表 M2号溝址出土遺物一覧表

番号	種類	器種	口徑(厘米)	底徑(厘米)	高さ(厘米)	重量(グラム)	出所	調査文書	備考	出土位置
1	須恵器	鉢	-	2.1	8.4	-	ロクロナデ・ナデ→磁部	ロクロナデ→台付付・磁部	完全実測	出土位置
2	土師器	甕	16.0	-	4.2	-	口輪ナデ	口輪ナデ・胴部ヘラケズリ	完全実測	出土位置
3	土師器	小杯	7.6	-	3.3	-	ミガキ	ミガキ→完全実測	完全実測	出土位置

第16表 出土土器物一覧表

番号	種類	器種	口徑(厘米)	底徑(厘米)	高さ(厘米)	重量(グラム)	出所	調査文書	備考	出土位置
1	土師器	杯	-	-	1.4	-	磁文→完全実測	ロクロナデ一部→高田	完全実測	出土位置
2	土師器	杯	-	-	-	-	ミガキ	-	完全実測	出土位置
3	石製品	磨石	13.6	5.0	3.8	368.8	上下溝部に磨打痕	正業に本紙 磨砂岩	完全実測	出土位置
4	鉄製品	刀子	15.0	1.6	0.4	114.06	-	-	完全実測	出土位置
5	陶製	片板	1.9	1.9	0.1	1.76	「真鍮水」	-	完全実測	出土位置
6	瓦質	瓦	-	-	-	-	小田	ヘラナデ	完全実測	出土位置



H1 完掘 (南より)



H1 カマド完掘 (南より)



H1 堀方 (南より)



H2 完掘 (南より)



H2 カマド完掘 (東より)



H2 カマド堀方 (東より)



H2 堀方 (南より)



H3 完掘 (南より)



H3 堀方 (南より)



H4 完掘 (南より)



H4 掘方、D2 完掘 (南より)



H5 完掘 (西より)



H5 堀方 (前より)



H6 完掘 (前より)



H6 カマド完備 (南より)



H6 カマド塚方 (南より)



H6 塚方 (南より)



H7 完備 (南より)



H7 カマド遺物出土状況 (南より)



H7 カマド完備 (南より)



H7 カマド塚方① (南より)



H7 カマド塚方② (南より)



H7 堀方 (南より)



H8 完掘 (南より)



H8 金具出土状況 (南より)



H8 カマド完掘 (南より)



H8 カマド堀方 (南より)



H8 堀方 (南より)



H9 完掘 (南より)



H9 堀方 (南より)



H10 完態 (南より)



H10 カマド完態 (南より)



H10 カマド堀方 (東より)



H10 堀方 (西より)



H11 完態 (西より)



H11 カマド完態 (西より)



H11 カマド堀方 (西より)



H11 堀方 (西より)



H12 完掘 (南より)



H12 堀方 (南より)



Ta1 完掘 (南より)



Ta2 完掘 (南より)



D1 完掘 (西より)



M1 完掘 (南より)



M2 完掘 (南より)



M3 完掘 (南より)



A地点 (西より)



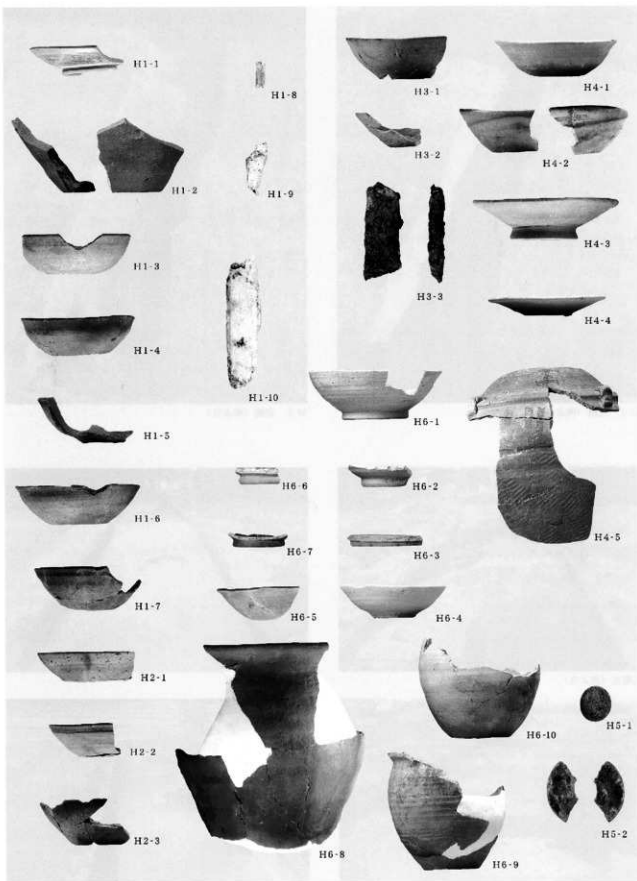
B地点 (西より)



C地点 (北より)



C地点南 (西より)





H7-1



H7-11



H7-21



H7-2



H7-12



H7-22



H7-3



H7-13



H7-23



H7-4



H7-14



H7-24



H7-5



H7-15



H7-25



H7-6



H7-16



H7-26



H7-27



H7-7



H7-17



H7-18



H7-28



H7-8



H7-19



H7-9



H7-20



H7-10



H7-29



H7-30



H7-32



H7-33



H7-31



H7-34



H7-36



H7-35



H8-1



H8-2



H8-3



H8-4



H8-5



H8-6



H8-7



H8-12



H8-9



H8-8



H8-10



H8-13



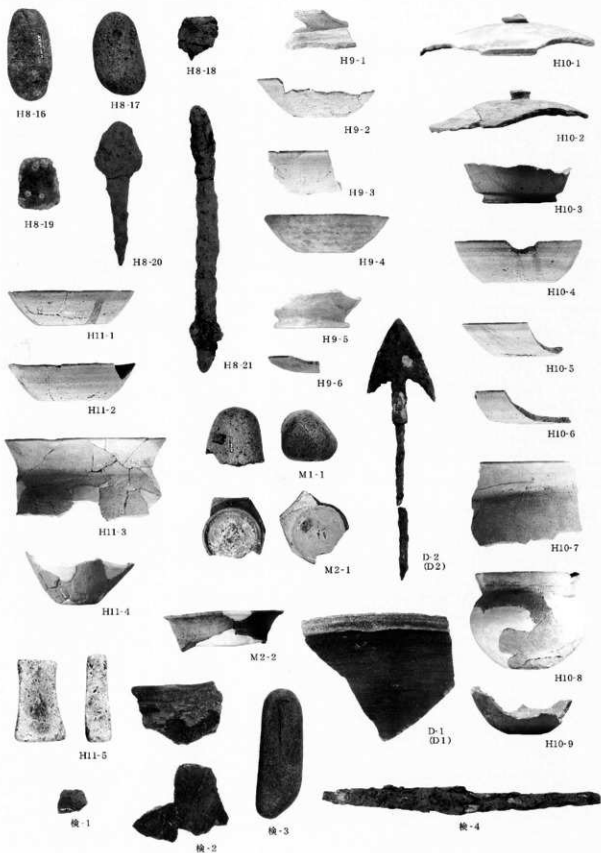
H8-14



H8-15



H8-11



佐久市埋蔵文化財調査報告書 第193集
周防畑遺跡群 南下北原遺跡
—長野県佐久市長土呂南下北原遺跡発掘調査報告書—

2011年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501
長野県佐久市中込3056

文化財課
〒385-0006
長野県佐久市志賀5953
TEL0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

報告書抄録

書名	南下北原遺跡
ふりがな	みなみしもきたはらいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	森泉かよ子
編集・発行機関	佐久市教育委員会文化財課
発行年月日	2011. 3. 15
郵便番号	385-0006
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	周防畑遺跡群 南下北原遺跡 (略号NMK)
遺跡所在地	長野県佐久市長土呂南下北原996-1 他
遺跡番号	7
経度	138° 27' 54
緯度	36° 17' 14"
調査期間	2009. 08. 06~08. 26 (現場)
調査面積	1,296㎡
調査原因	宅地造成事業
種別	集落址
主な時代	奈良・平安
遺跡の概要	集落址-奈良-竪穴住居址3-土師器+須恵器+鉄製品+青銅品 +羽口+編物石 -平安-竪穴住居址-土師器+須恵器+灰釉陶器+鉄製品 +皇朝十二銭「貞観永寶」+布目瓦
特記事項	「刑部仁丸」墨書土器・皇朝十二銭「貞観永寶」・布目瓦

